

日英語の表現形式の対照性について

—脳科学の知見を交えて—

A Comparative Study of English and Japanese Expressions:
With a View from Brain Science

有 吉 淳一郎

日英語の表現形式の対照性について —脳科学の知見を交えて—

A Comparative Study of English and Japanese Expressions:
With a View from Brain Science

有吉 淳一郎

1. はじめに

言語が異なれば、語彙、文法、音声など、さまざまな面において差異が認められる。日本語と英語であれば、日本語がSOVの語順を取るのに対し、英語はSVOであり、また日本語が開音節言語であるのに対し、英語は閉音節言語に分類される。とはいえ、すべての面で異なるわけでもない。例えば、ある過去に起きたロバートという人物による読書行為について、日本語において「ロバートは本を読んだ」と表現される場合、これは英語ではRobert read a book.といったように表現されるであろう。両者は語彙、語順、冠詞の有無などの点で差異があるものの、語と語の間には対応関係が見られ、またともに、行為者であるロバートを起点とした事態描写がなされており、全体としては大差がないように思われる。

しかしながら、日本語と英語の表現形式を比べると、語彙や文法形式などの違いはもとより、事態の捉え方そのものが根本的に異なっていると思われるケースがある。以下のペアが好例であろう。

- (1) a. 星が見える。
- b. I see stars.

夜空を見上げると、星が浮かんでいる。その情景を描写する場合、日英語のそれぞれにおいては(1a)(1b)のように発せられる。「星が見える」を文字どおりに英語に直せば、Stars are visible.とでもなるであろうか。この文自体は文法的であるものの、ここで想定されている状況下で発せられる表現としては、きわめて

不自然に響く。I see stars.も同様である。これは文字どおりには「私は星を見る」といった感じの日本語になろうが、この文もまたきわめて不自然に響くこととなる。

以上のように、夜空に浮かぶ星々を目にし、それを表現する場合、日本語では「星が見える」が、そして英語ではI see stars.が自然な言い回しであるわけであるが、このように日英語において表現形式が異なる理由は、話者の視点の違いにあると考えられる。¹ 日本語の場合には話者の視点が場内にあり、その視点を通じての「見え」がそのまま描写される。一方、英語の場合には主語 I の生起が義務的なわけであるが、話者の視点が場外にあり、自らの姿をその場外の立ち位置から眺めているかのような、傍観的な描写となる。

これら日英語における話者の視点のあり方は、概略、以下のように図示されるであろう。

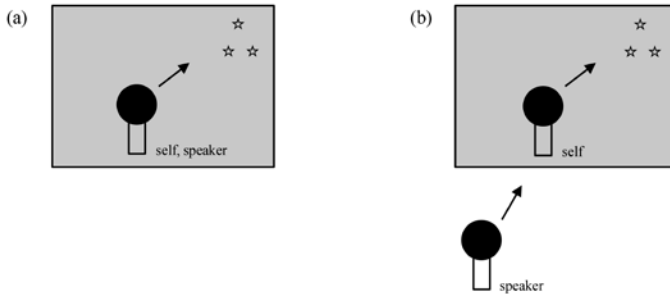


図 1

(a)が日本語話者、(b)が英語話者の視点のあり方を示したものである。枠線で囲まれたグレーの部分、事態の場を表している。日本語の場合、話者は場の中に位置、いわば埋め込まれた形で存在しており、視点は場内にある。その視点から捉えられる見えが言語化される。自分の姿は視野に入らないため、「私」が言語化されることもない。対して英語の場合は、視点が場外にあり、話者がまるで幽体離脱でもして、星々を見ている自分自身の姿を見ているかのような、それゆえに自己が I として言語化される——このように考えられるわけである。

以上、(1a, b)の日英語間に見られる表現形式の対照性は、日英語話者の視点のあり方の違いに帰されると考えられるわけであるが、ここで素朴な疑問が湧き上がる。日本語と英語は異なる言語であるとはいえ、その使用者は同じ「ヒト」であり、身体性に差はない。それにも関わらず、なぜ日本語話者の場合には視点が場内に置かれ、英語話者の場合には視点が場外に置かれるのか、という問題である。事態認識における日本語話者と英語話者の視点のあり方が異なるのはなぜか、そしてその違いはどのようなメカニズムにより動機づけられるのか——その根拠的理由はいかに説明されるのであろうか。

このような視座のもと、本稿では月本(2008)による脳科学の知見に基づき、日本語話者と英語話者とでは実は発話時の脳の働きが異なっており、事態認識における両者の視点のあり方の違いがこのことに起因すると考えられることを提示、さらに、日英語話者の事態認識における視点のあり方の観点から、日英語の表現形式に見られる対照性について考察を進めていく。²

2. 日英語話者の発話時の脳の働きについて

日本語話者と英語話者とでは、発話時における脳の働きが異なっている——両者とも同じ「ヒト」であるがゆえに意外に思われるかもしれないが、では両者はどのように異なるのであろうか。この点について、月本(2008)では種々の実験データに基づき分析がなされている。

脳は、大脳、小脳、脳幹の3つの部分に大別され、大脳は左脳と右脳から構成される。脳内の個々の部位は固有の機能・役割を担っており——これは「機能局在」と呼ばれる——このうち、言葉の処理を司る言語野は左脳に、音に関する処理を司る聴覚野は左脳と右脳のそれぞれに所在している。

さて、我々は発話時、自らの発する音を聴いているわけであるが、それは耳を介してのみである——通常はこのように思われるであろう。しかしながら、実は発話時には、脳内において発声系から聴覚野へと神経信号が伝達されている、換言すれば、我々は脳内で内的に音を聴いており、日本語話者の場合には左脳の聴覚野で、英語話者の場合には右脳の聴覚野で音——厳密には、母音——を聴いて

いることが明らかとなっている。³ このように、発話時に内的に母音を聴く部位について、日本語話者は左脳、英語話者は右脳というようにそれぞれ異なるわけであるが、これは、ヒトの脳神経回路が母国語を正確に聞き取ることができるように、その学習過程において組織化されることによる。

日本語は基本的に母音、もしくは子音+母音から構成されており、母音比重が大きい言語である。そこで日本語話者の場合には、母音を聞き取りやすいように脳神経回路が組織化され、そして発話時に内的に聴かれる母音は、日本語においては主要音であるため、その神経信号は直接、言語を司る左脳の聴覚野へ伝達され聴かれることとなるのである。一方、英語は母音、もしくは子音+母音から構成される語彙が少なく、子音比重が大きい言語である。そこで英語話者の場合には、子音を聞き取りやすいように脳神経回路が組織化され、そして発話時に内的に聴かれる母音は、英語においては主要音ではないため、その神経信号は左脳ではなく右脳の聴覚野へと伝達されることとなるのである。英語においては、母音はその主たる構成音ではないため、言語を司る左脳ではなく、右脳の方の聴覚野へと選り分けられてしまうわけである(月本 2008: 188)。これら、日本語話者ならびに英語話者の発話時における神経信号伝達のあり方の違いは、以下のように図示される。⁴

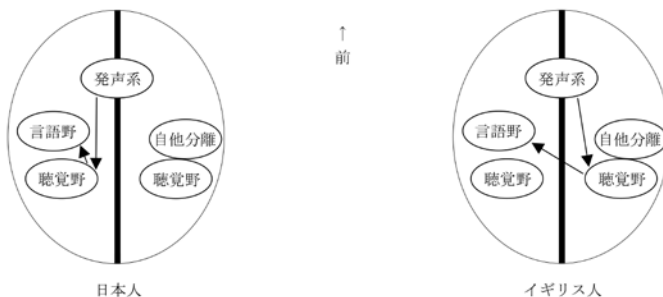


図2

以上、英語話者は日本語話者とは異なり、発話時に神経信号が発声系からまず右脳へと伝達されるわけであるが、次の点に着目したい。それは、この信号伝達

がなされる右脳の聴覚野が、自他分離を司る部位に近接しているという事実であり、そしてこのことにより、月本が指摘するように、発話に際して英語話者は自他分離を司る部位が刺激を受けるのに対し、日本語話者はこの自他分離を司る部位が刺激を受けないと考えられる点である。

さてここで、まさにこの違いこそが、先に図1で見た日英語における話者の視点のあり方の違いの要因である——このように考えられるのではないだろうか。すなわち、英語話者の場合、脳の自他分離を司る部位が刺激を受けることにより、その認知プロセスにおいて自他分離の認識が発現する。自他分離とは、自己と他者とを分かち認識の様態であるため、他者と同様、自己をもがその認識において対象化される。このために話者の視点が場外に置かれる。話者の事態認識は客体化され、まるで事態の展開する場面の外から、星を眺める自分自身の姿を眺めているかのような事態認識のあり方となるのである。

これに対し日本語話者の場合は、脳の自他分離を司る部位が刺激を受けないため、その認知プロセスにおいて自他分離の認識が発現せず、話者の視点は事態の展開する場内に置かれる。話者の事態認識は主体化され、その視点を通じて捉えられる見えがそのまま言語化される——視野の中に立ち現れるのは夜空に浮かぶ星々であり、その事態認知プロセスにおいて自己が対象化されることはないのである。

以上、日本語話者・英語話者の視点の違いは、発話時における脳の働きの違いに起因するものと考えられるわけであるが、視点の違いは、事態認識のあり方そのものに違いをもたらすことから、冒頭で見た(1a, b)以外にも、日英語の表現形式にさまざまな対照性をもたらすと考えられる。そしてこのことは同時に、これらの表現形式の対照性が、日英語話者の脳の働きの違いによって、その根拠を与えられることを意味することとなる。日本語話者ならびに英語話者の視点の違いは、それぞれの表現形式にどのような対照性をもたらすのであろうか。以下では具体的事例を交え、考察していく。

3. 具体例考察

森田(1998)は、日本語の分析において発話の場面を考慮することの重要性を指摘、日本語表現の場面依存性について論じている。

(2) もう時間だ。 (森田 1998: 9)

日本語ではこのような表現はごく自然であり、また頻出するわけであるが、あらためて考えてみると、主語も明示されておらず、いったい何が時間であると述べているのか、一切不明である。このままでは英語に直しようもない。この点、以下も同様である。

(3) 赤い花なら曼珠沙華。 (森田 1998: 12)

この文はいったい何を言わんとしているのか。何が赤い花なら、と言っているのか。何を唐突に曼珠沙華、と述べているのか。これもまたよく分からない表現なのである。(2)と同様、このままでは英訳が不可能であろうことは想像に難くないであろう。しかしながら言うまでもなく、これらはいずれも日本語として適切な表現である。このような日本語の表現に見られる特異性は、どのように理解されるであろうか。森田は次のように述べている。

日本人は、そして、とりもなおさず日本語では、表現に際して、現在の事象である事柄や周囲の状況を、「あ、もう時間だ」とか、「赤い花？それは曼珠沙華だ」と自分自身の目でとらえ心で感じた外界のこととして、聞き手にそのまま投げ掛ける。己を客体化し対象化して、「私は時間を持たない」のような言い方は決してしない。話者はあくまで外の世界を眺めとらえる主体そのものであるから、意識の外にある。(…)というわけで、日本語がいちいち「私」を文の中に立てていかない言語であるということは、話し手が表現を進める“話者の目”として言葉の背後に隠れてしまい、た

だその視点を通して対象と対峙している、そのような立場に立つ言語だということである。 (森田 1998: 13)

日本語話者が、外界に対する認知主体として特徴づけられ、その言葉の表出のあり様について論じられているわけであるが、これはまさに、日本語における視点のあり方を捉えたものと理解される。

日本語では話者の視点が場内に置かれるため、話者による事態認識は言うまでもなく、この場内の視点を通じて行われることとなる。場とは、時間が流れ事態が展開する空間である。話者はいわば、このような「現実の場」に置かれた視点を通じて外界を捉え、事態を認識し、そして言葉を紡ぎ出していくことから、そこには必然的に話者自身による事態認識のあり方——外界に対する捉え方・心のあり様など——が投影されることとなる。日本語の表現形式は主体性により特徴づけられるが、これは話者自身による、場内に置かれた視点を通じての外界とのインターアクションの所産であると言えよう。表出される言語表現は、話者の主観性に基づき、またその内容は個々の場に根ざしたものとなるため、一見すると意味が不明瞭であり、ときに非論理的であるといった印象までも抱かれることとなるのであろう。⁵

さて、上述のように、場には時間が流れ、事態が展開する。日本語ではこのような場に置かれた視点に基づき言葉が表出されていくことから、その表現内容は必然的に臨場感を帯びることとなる。池上(2011)で例示されている以下のペアは、このことを示す好例であろう。

- (4) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成『雪国』)
- b. The train came out of the long tunnel into the snow country.
 (E. Seidensticker訳)

川端康成の『雪国』の冒頭部の日本語文と英訳である。まず日本語文(4a)であるが、汽車の座席から見える、車窓を通じての眺めが描かれている。長く続く暗

いトンネルから出ると、パッと一面に雪景色が広がる。雪とトンネル内の対比に、明と暗の鮮やかなコントラストが感じられる。まさに汽車に乗っている人物自身の視点から捉えられる情景が、その変化とともに描き出されている。読み手は、このような「私」の視点を通じ描かれる情景を、その視点に自分の視点を重ね合わせ読み込んでいく。「読み手も作者の心に乗り移り、同じ場面の同じ視点に立って追体験していく」(森田1998: 15)のである。読み手は、まるで自分自身がその情景の中に入り込んでいるかのような錯覚さえも覚えるかもしれない。『雪国』の冒頭文が名文と称される所以であろう。

この点、サイデンステッカーによる英訳版は、原文と大きく異なることに気づく。まず形式上の違いとして、日本語では主語が明示されていないのに対し、主語(the train)が据えられている。そして描写の違いとして、日本語では、汽車の席に座った人物の視点からの見えである、目の前に広がる光景の移りゆくさまが臨場感をもって描き出されているのに対し、汽車がトンネルを抜け、雪国へと姿を現す姿が鳥瞰的に描かれている。日本語の方で感じられる情景の刻々と移りゆく様子、臨場感に欠けると言わざるを得ないであろう。このような描写は、まさに英語話者の場外視点を通じての事態認識のあり方の反映として理解されるものである。日本語における話者が、自己を取り巻く外界を捉え、その様態を認識する主体であるのに対し、英語における話者は、場からズームアウトした視点から、事態全体を客体化して認識する主体なのである。そしてそこでは、本稿冒頭で見たように、自らの存在もが、外在する対象の1つとして認識・対象化されるのである。⁶

日英語における視点のあり方は、各々の文法形式にも反映される。よく知られているように、日本語では人称を表す語彙が豊富である。いくつか例を挙げる。

- (5) a. 私、あなた、彼、彼女、こちら、そちら、あちら、そのほう、そち
- b. 僕、俺、わし、我輩、小生
- c. あんた、おまえ、てめえ

この点、英語はきわめてシンプルである。

(6) I, you, he, she

日本語では呼称に関しても、「様」や「さん」など、さまざまな種類がある。

(7) 松田殿、松田様、松田氏、松田さん、松田君

対応する英語の表現は、Mr. Miss. Mrs.などであろうか。人称代名詞と同様、これまたきわめてシンプルである。

これらの日本語の語彙は、概略、自己からの方向性に基づくものと、自己との関係性に基づくものであり、ともに自己を起点に、他者に対する捉え方が投影されているものと理解される(森田 1998: 26, 59)。自己を起点とし、方向性に基づいて「こ・そ・あ」により近称・中称・遠称を使い分け、そして関係性に基づいて、自分を「僕」や「俺」と、また相手を「殿」「様」「さん」などを付して呼ぶわけである。一つひとつの語彙に、話者が他者をどのように捉えているのか、そのあり様が表出されているわけである。このような認識のあり方は、話者の視点が場内に置かれ、外界に対する認識がその視点を通じ主体化されるからに他ならない。

このような日本語に対し、英語では上掲のように、人称ならびに呼称に関する語彙はきわめてシンプルなものとなるが、これは、話者の視点が場外に置かれることにより、そしてその視点を通じ、事態認識が客体化されることにより、個々の対象が同列にみなされるためである——このように考えられるであろう(池上 2011: 34)。2人称ならびに3人称と同様に、自己までもが客観的な位置づけがなされるために、日本語で見られるような、話者の主体性に基づき構築される複雑な体系性は必要ないのである。

授受表現をめぐる対照性についても同様に、視点の観点から捉えられる。

- (8) a. 友人は私に贈り物をくれた。
b. 私は友人に贈り物をあげた。
- (9) a. 上司は私に贈り物をくださった。
b. 私は上司に贈り物を差し上げた。
- (10) a. My friend gave me a gift.
b. I gave my friend a gift.
- (11) a. My boss gave me a gift.
b. I gave my boss a gift.

日本語では授受行為を表す際、動詞を細かく使い分ける。(8)では友人と私との、(9)では上司と私との間での授受行為について述べられている。ともに(a)では私が受け手であり、(b)では私が与え手であるが、(8)に示されているとおり、友人との場合にはそれぞれ「くれる」「あげる」が、そして(9)に示されているとおり、上司との場合にはそれぞれ「くださる」「差し上げる」といったように、用いられる動詞が異なる。一方、英語ではこのような語彙的な差異は見られない。(10)(11)に示されているように、どの場合においても一律にgiveが用いられる。日本語とは異なり、これまた実にシンプルである。

以上の対照性は、先ほど見た人称代名詞などの場合と同様、日英語における話者の視点の違いの反映として理解される。日本語では話者の視点が場内に置かれることにより、事態認識が主体化されるのに対し、英語では話者の視点が場外に置かれることにより、事態認識が客体化される。日本語では事態認識が主体化されるために、自己と他者との関係性に基づき、その捉え方が反映される。対して英語では事態認識が客体化されるために、自己も他者も同列の存在として扱われるため、物の授受について、その方向性だけが示されればよいのである。日本語において見られるような自己と他者との関係性は、そこには反映されない。授受表現に見られるこれらの対照性はいずれも、日英語における話者の視点のあり方から捉えられるのである。

本節の最後に、日英語の感覚形容詞を取り上げる。よく知られているように、

日本語と英語とではその用法に差異が見られる。

- (12) a. 私はうれしい。
b. *あなたはうれしい。
c. *彼はうれしい。
d. あなたうれしそうだ。
e. 彼はうれしそうだ。
- (13) a. I am happy.
b. You are happy.
c. He is happy.

日本語の「うれしい」は、(12a)と(12b, c)の対比に示されているように、主語が1人称の場合にはそのままの形で用いられるものの、2・3人称の場合にはそのままの形では用いられない。「…そうだ」という語形を付加する必要がある。対して英語はどうかというと、(13)に示されているように、主語の人称に関係なくすべてにおいてbe動詞+happyといった同じ形が用いられる。日本語とは異なり、主語の人称はその形式に違いをもたらさないのである。ちなみにこの点に関連し、手元の英和辞典でhappyを引いてみると、語義として、「うれしい」と「うれしそうな」が並列して挙げられているが、これらはそれぞれ、1人称主語、2・3人称主語に対応したものと理解されるであろう。

さて、以上の日英語の対照性についても、これまでに見てきた日本語話者と英語話者の視点のあり方から捉えられる。先に見たように、日本語では話者の視点は場内に置かれるため、話者はその視点を通じて自己を取り巻く外界を捉え、2人称および3人称と対峙する。それらに対して抱かれる話者による主体的な認識のあり様が言葉に表出されることとなるわけであるが、ここで次のように考えられるのではないだろうか。すなわち、(12a)では話者により自分自身の心のあり様について主体的に述べられている。(12b, c)においても同様に、他者の心のあり様について、話者による主体的な把握に基づいて述べられていることになるわ

けであるが、話者は自分自身の心のあり様については主体的に把握はできて、他者の心のあり様については主体的に把握することは不可能であるために、(12b, c)は容認されない。他者の心のあり様については、その様子などから察するしかなく、(12d)および(12e)のように、「…そうだ」「…ようだ」といった形を付加せざるを得ない。対して英語では、話者の視点は場外に置かれる。先述のとおり、その事態認識は客体化される。自己も他者も対象化され、同列の存在として捉えられる。自己は話者自身から、まるで他者を見るかのごとく客観的に捉えられるわけである。よって、自己に対しても他者に対しても、その人称に関係なく、1・2・3人称のすべてにおいて同じ形式が用いられるのである。

以上、具体的事例を通じ、日英語の表現形式の対照性について、話者の視点のあり方から捉えられることを考察した。

4. いわゆる「コト的」「モノ的」について

本節では引き続き日英語における視点のあり方に基づき、両言語の表現形式に見られる対照性について考察するが、以下では特に、日英語の表現形式を特徴づける、いわゆる「コト的」「モノ的」といった特性に焦点を当てたい。

日英語の表現形式について、日本語はコト的であるのに対し、英語はモノ的であることが指摘される。⁷

(14) a. He is a good cook.

b. 彼は、料理が上手だ。

(15) a. She gave a little laugh.

b. 彼女は、小声で笑った。

(安藤 1986: 270)

これらは安藤(1986)が、英語と日本語とを、個体と状況という対立において対照している事例である。(14)(15)ともに、(a)はいわゆる名詞構文の例であり、対応する日本語(b)ではそれぞれ、「料理が上手だ」「小声で笑う」など、形容詞、動詞に対応した表現となっている。英語がモノ的であるのに対し、日本語がコト

的であることを示す好例であると言えよう。(b)の日本語をそれぞれ、「彼は上手な料理人だ」「彼女は小さな笑い声を出した」のように直訳風に日本語にすると、不自然に響いてしまうことは言うまでもないであろう。

以下のペアも同様の対照性を示している。

- (16) a. John saved a drowning child.
b. ジョンは、子供がおぼれるのを助けた。 (安藤 1986: 270)

英語では、助ける対象はa drowning child——溺れている子供——すなわち、個体である。対して日本語では、その対象は「子供が溺れる」であり、状況となっている。動詞「助ける」は、本来的にはその対象として、このような状況もしくは事柄ではなく、人や動物などの名詞、すなわち、(a)に見られるようなモノを取るはずである。にもかかわらず、日本語においては(b)のようなコト的な表現を目的語とした言い回しが用いられる。英語はモノ的であるのに対し、日本語はコト的であるといった傾向性が確認されるのである。

英語表現を特徴づけるモノ的傾向性については、次例も好例であろう。

- (17) A: “What was that?”
B: “It’s little Jimmie who has fallen down the stairs!” (安藤 1986: 270)

何かが落ちた音を聞いたAが、その音は何の音なのかBに聞く。Bの返答文は、名詞を中心とした構成となっており、直訳すれば、「階段を落っこちたジミーだ」とにでもなるわけであるが、そのように訳してしまうと、日本語としては何とも不自然である感は否めない。「ジミーが階段から落っこちたんだ」といったように、状況中心——すなわち、コト的——に訳出した方が日本語としてしっくりとくることは言うまでもないであろう(安藤 1986: 270)。英語はモノ的であるのに対し、日本語はコト的であるといった対照性がここでも確認されるのである。⁸

さて以上、英語・日本語の表現形式を特徴づける、いわゆる「モノ的」「コト

的」といった傾向性について概観したが、これらの対照性についても、日英語それぞれにおける話者の視点のあり方から捉えられるであろう。すなわち、英語話者は発話時、右脳に所在する自他分離を司る部位が刺激されるため、その事態認識は自己と他者とを分かち様態となる。そしてその事態認識は、場外に置かれた視点を通じ、これら、自己や他者というモノの抽出プロセスを経ることから、モノ的となる。一方、日本語話者は発話時、この脳内の自他分離を司る部位が刺激をされない。英語話者の場合とは異なり、事態は、場内の視点を通じ、自己や他者というモノの抽出プロセスを経ず、そのあり様のままで認識されることとなる。このことにより事態がコト的に認識される——このように考えられるのではないだろうか。

以上は、事態のあり様は、原初的にはモノ的ではなくコト的である、ということをも主張することとなるわけであるが、これは岡(2013)から支持されるところであろう。

(…)場所の論理では、あるのは動的な現実であり、その現実は、物によって構成されているのではなく、事によって作られていると考える。本来は「こと」があり、この「こと」を分析的に見ることによって、初めて「もの」が見えてくるのであって、その逆ではない。物を中心とする世界観はモノ的世界観であり、事を中心とする世界観はコト的世界観である。

(岡 2013: 63)

まず場に存在しているのはコトであり、このコトを分析することで、モノがいれば抽出されるわけである。まずモノがあり、そこからコトが見出されるわけではないのである。

以上、日英語の表現形式を特徴づける、コト的・モノ的といった対照性について、当該言語話者の視点のあり方から捉えられることを論じた。

5. おわりに

以上、本稿では、事態認識における日本語話者の場内視点ならびに英語話者の場外視点といった日英語を特徴づける視点のあり方の違いについて、話者の発話時における脳の働きの違いに求められることを概観、その上で、日英語の表現形式に見られる対照性について、当該言語話者の視点のあり方から捉えられることを論じた。日英語の話者の視点の違いが投影されるのは言葉だけではない。その異なりは平行する形で、例えば文化的諸相など、他の分野にも対照性をもたらすことが知られている——そこには相同性が確認されるわけである。視点・事態認識のあり方は、ヒトの身体性に基づくものであるが、言葉に留まらず、文化的側面にいたるまで広く人間の営みに根ざしており、その一つひとつを形作っているのである。身体性・言語・文化——これらの視座に立つ、より広範な考察について今後の課題としたい。

注

1. 例えば、池上(2006, 2011a, b)、深田・仲本(2008) など。
2. 脳科学の知見に基づく先行研究として、濱田(2019) が挙げられる。日本語話者・英語話者の脳の仕組みの観点から、日英語における発話・事態認識など、その言語メカニズムについて詳細な考察がなされている。
3. この点に関してさらに言えば、発話時は聴覚野の活動が約半分まで抑圧される、換言すると、発話時には耳からの音で聴くのが約半分になり、残りの半分は脳内で聴いている、ということとなる(月本 2008: 189)。
4. 図2は月本(2008: 193)に基づく。なお、「日本人」「イギリス人」の表記についても月本に準じたものであるが、より厳密にはそれぞれ、日本語・英語の母語話者を意味するものと解されるものである(月本 2008: 3, 201)。
5. 雑誌『タイム』で組まれた日本特集号では、日本語は「悪魔の言語」と題されていた、とのことである(池上 2007: 26)。
6. 英語のこのような特徴を示す好例として、I enjoyed myself.やI found myself silly. といった表現形式が挙げられるであろう。なお、自己を他者と同様に客観的な視点から捉えるということは、自分自身を、外在する大勢の他者を構成する一員とみなすことであることから、ボランティア活動など、英語話者の協働・連帯に対

する意識づけにつながるものと考えられる。この点、日本語話者は、場内の視点を通じ外界を主体的に捉える存在であり、自己はその認識において対象化されないため、そのような意識は芽生えにくいものと考えられるであろう（森田 1998: 38）。

7. 例文 (14) (15) の (b) については、原文ではカタカナ表記。なお例文(16)についても同様。
8. This medicine will make you feel better.の類も同様に考えられるであろう。典型的な無生物主語構文であり、直訳すれば「この薬はあなたに気分よく感じさせるでしょう」といったようにモノ的となるが、この場合も「この薬を飲めば気分が楽になりますよ」とコト的に訳出する方が、日本語としてはるかに自然である。また類例として、英語のI can hear birds.についても、事態からモノが抽出され、そのモノを中心に——モノ的に——表現されているわけであるが、この文についても日本語にする場合は、「鳥が鳴いているのが聞こえる」や「鳥のさえずりが聞こえる」といったように、全体の状況を捉えて、つまり、コト的に訳出する方がきわめて自然であることは言うまでもないであろう。

謝辞

本稿執筆にあたり、査読者の方より大変貴重なご意見を頂戴した。厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

- 安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店。
- 荒木博之(1994)『日本語が見えると英語も見える』中央公論新社。
- 深田智・仲本康一郎(2008)『概念化と意味の世界』（講座 認知言語学のフロンティア 3）, 研究社。
- 濱田英人(2019)『脳のしくみが解れば英語がみえる』（一歩進める英語学習・研究ブックス）, 開拓社。
- 池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚』NHK出版。
- 池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』筑摩書房。
- 池上嘉彦(2011a)「言語研究のおもしろさ」『ことばワークショップ—言語を再発見する—』（開拓社言語・文化選書26）, 1-45, 開拓社。

池上嘉彦(2011b)「日本語と主観性・主体性」『主観性と主体性』(ひつじ意味論講座 第5巻), 49-67, ひつじ書房.

森田良行(1998)『日本人の発想、日本語の表現』中央公論社.

岡智之(2013)『場所の言語学』(ひつじ研究叢書<言語編> 第103巻), ひつじ書房.

月本洋(2008)『日本人の脳に主語はいらない』講談社.

辞書

井上永幸・赤野一郎(編)『ウィズダム英和辞典 第4版』(2019)三省堂.